

社会情報研究資料センターニュース

第24号 (2014.3月)

目次	「坪井誠太郎資料」の科学史研究における重要性 —坪井の偏光顕微鏡研究に対する評価の検討— ……………	梶内文彦 1
	小野秀雄関係資料『磐手新聞』について ……………	玉井建也 6
	社会情報研究資料センター所蔵資料の保存対策 ……………	飯野洋一 10
	センター情報 ……………	15



阪神淡路大震災関係の新聞原紙（中性紙箱収納） 新館書庫M2階

「坪井誠太郎資料」の科学史研究における重要性 —坪井の偏光顕微鏡研究に対する評価の検討—

柄内文彦

1. はじめに

センターニュース前号で述べたように¹、筆者は2010年度中ごろから、社会情報研究資料センター（以下、「センター」）が収集・保管している、地質学者坪井誠太郎（1893-1986）に関する資料（以下、「誠太郎資料」）。なお、以下、「坪井」は坪井誠太郎を指す）の調査を進めている²。誠太郎資料の一部（といっても相当量になるが）は、メタ情報が付されて本郷キャンパス情報学環図書室の書庫に保管されている³。それらを除いた大半の資料は、目白台キャンパス西2号館に段ボール箱約250箱に収められて保管されており、その概要調査は一部を除き完了した。

概要調査から、筆者は、誠太郎資料が近現代の日本地質学史資料として高い価値を有している、と考える。本稿では、誠太郎資料概要調査の中間報告として、日本地質学界における坪井の影響を、誠太郎資料から読み解いてみたい。

2. 日本地質学界に坪井誠太郎が及ぼした影響

誠太郎資料の読解の前に、日本地質学界に坪井が及ぼした影響を確認しておこう⁴。

坪井は1917年に東京帝国大学理学部地質学教室を卒業すると同時に、小藤文次郎の下で地質学教室の助手となった。1921年助教授に昇進すると同時に欧米に留学し、1923年に帰国すると小藤を継いだ。1928年からは教授として、1954年の停年退官まで地質学研究室を率いた（図1は、米国に向かう船の上で撮られた記念写真）。

坪井が進めた火成岩成因研究は、偏光顕微鏡を用いた光学分析法を導入した点が独創的であり、記載的手法による研究が主体だった1920年代から1930年代の日本地質学界において、若手研究者の関心を集めた。しかし、物理学や化学のかなり高度な知識を必要としたことから、坪井の研

究内容を学問的に深く理解できた研究者は当時は多くなく、一方で、坪井の論理的厳密さを求める姿勢に違和感を覚え「形式的だ」と批判する研究者は少なくなかった。ただし、第二次大戦前には、そうした批判が公然となされることはなかった。

戦後になると、地学団体研究会を1947年に設立した井尻正二（1913-1999。古生物学者）らが、学界民主化を謳って活動するにあたり、坪井を古い封建的な悪しき学界体制の象徴とみなして、1954年に坪井が停年で東大地質学教室を退くまで様々な批判を行った。しかし、停年後は坪井への批判は程度・頻度ともに急速に減少した。

これらのことから、筆者は従来、坪井の後継世代の研究者たちによる最新の研究成果が坪井たちによる知見を置き換えたことと相まって、日本地質学界への坪井の影響力は、彼の停年を境に急に減少した、と考えていた。しかし、誠太郎資料は、1970年代になっても坪井の偏光顕微鏡研究が日本地質学界において依然として高く評価されていたことを示している。そのことを次節で具体的に見てみよう。

3. 坪井の偏光顕微鏡研究に対する評価を誠太郎資料から評価すると...

3.1 初版から20年余りが経っても版を重ねていた著作

1959年に岩波書店から出版された『偏光顕微鏡』は、坪井の代表的な著作の一つであり、教科書として良く用いられた。それは、岩波講座「地質学及び古生物学 鉱物学及び岩石学」一冊として1931年に著した『鉱物及び岩石の光学的鏡検法』を、1939年の『岩石学Ⅰ』（岩波全書）を経て

¹ 柄内文彦：「『坪井誠太郎資料』の意義—同資料の概要調査から得られた知見」、『センターニュース第23号』、2013、pp. 1-6.

² 2012年4月以降の本調査および研究は、JSPS 科研費（課題番号24650583）の助成を受けて行っている。

³ 「誠太郎資料」は、センターが高度アーカイブ化事業で収集した「坪井家関係資料」の一部である。その中で坪井正五郎（1863-1913。誠太郎の父）らに関する資料はアーカイブ化され、デジタル・アーカイブおよび冊子体の『坪井家関連資料目録』として公開されている。本郷キャンパスに保管されている誠太郎資料は、正五郎に関係する（と思われる）とされたものである。

⁴ 本節の内容は『センターニュース』前号の拙稿（柄内文彦：op. cit.）と重なるので、簡単に述べることにしたい。



図1 米国行き春洋丸で撮られた集合写真(1921年8月)

仮装をしていることから、日付変更線通過祭の記念写真と思われる。一番左の座っている人物が坪井。その後ろに立っている左から二人目は物理学者の田中館愛橘(1856-1952)。右上は両者を拡大したもの。(資料複写・修正：栃内文彦)



図2 坪井の書斎に置かれていた机

引き出しが二つ付いている(左側の引き出しは把手が外れている)。この机は「坪井家関係資料」として収集されたが、引き出し内の調査がなされないまま情報学環図書室書庫に保管されていた。2013年10月ごろに飯野図書係長が引き出し内の資料を発見し、12月に筆者が概要調査を行った。(撮影：栃内文彦)

書き改めたもので、いずれも次のように高く評価されている⁵。

これらは…世間普通の編纂教科書とは違って、[坪井]先生の心のなかにある体系を書かれたもので、非常にはっきりとした個性的な本である。その上先生は、厳密・端正・平明で、一点の曖昧さも残らないような模範的な学術用日本文をお書きになったので、上記の本には一種の芸術品のような趣がある。

坪井の書斎に置かれていた机(図2)の引き出し内に遺されていた岩波書店発行の「御印税支払書」や、所得税の確定申告書控などの書類(図3)に記されている印税額からは、『偏光顕微鏡』が、以下に示すように1960年代後半になっても増刷を重ねていたことが分かる⁶。

1967年度： 580～600部

1971年度： 500～510部

○1974年度： 500部

1975年度： 500～510部

1976年度： 970～980部

⁵ 都城秋穂：「坪井誠太郎先生と日本の地質学」、『科学』56(12), 1986, pp. 768-769.

⁶ 2013年12月19日の概要調査による。

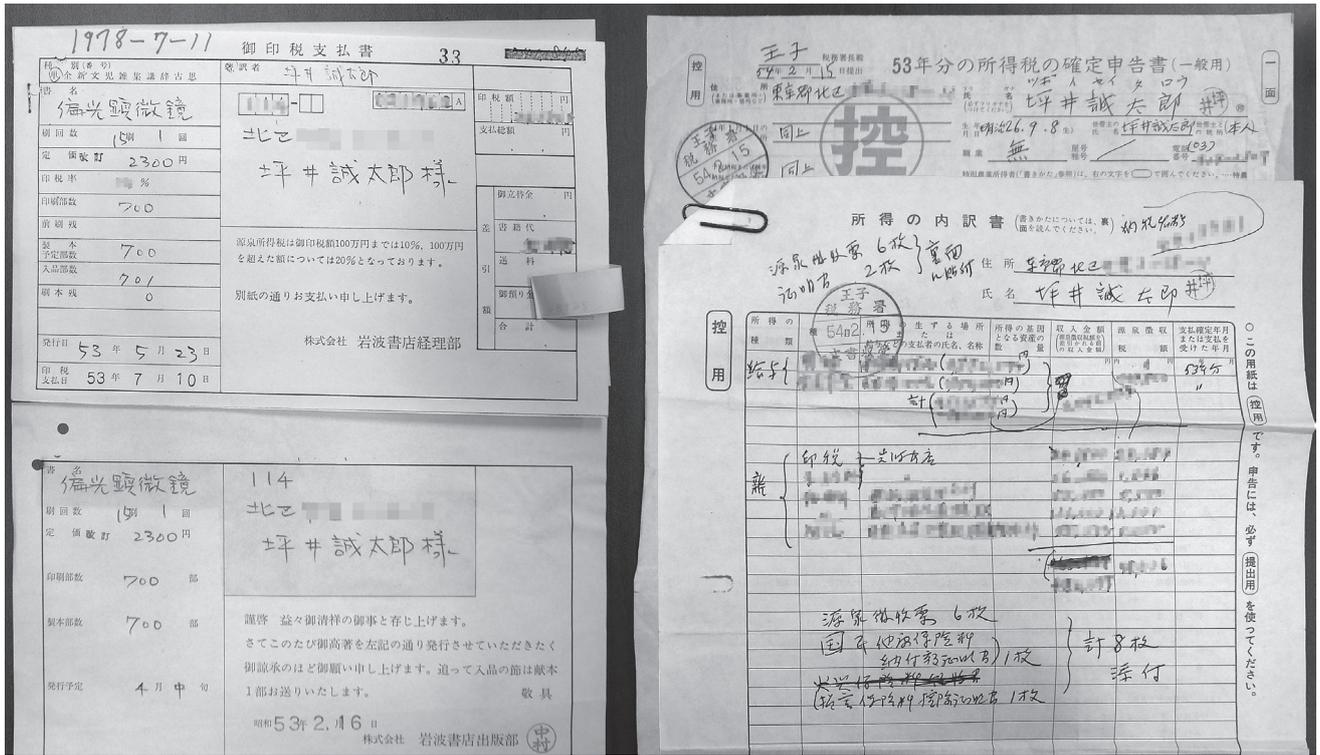


図3 1978年度の「御印税支払書」と「所得税の確定申告書控」

こうした資料から、印刷部数を追うことができる。なお、極めて私的な内容につき金額等を伏せる処理を行なっている。(資料複製・修正：柄内文彦)

- 1977年度： 1000部
- 1978年度： 701部
- 1979年度： 710～720部

「○」を付した1974、1977、1978年度は、印刷部数が明示されており、数値は確実である。1967、1971、1975、1976、1979年度については、岩波書店から支払われた印税額しか分からない。しかし、印税率は変更されていない。また、定価は改定されているが、前後の年度から類推できる。そうすると、印刷部数は上記程度と推定できる。いずれも1974、1977、1978年度の印刷部数に近い数値であることから、推定は妥当と思われる⁷。

同書については、坪井が没した1986年当時において「広く読まれている立派な教科書である」⁸と評価されているが、誠太郎資料はその評価が妥当であることを明確に示していると言えよう。

3.2 1980年過ぎに行われた坪井の著作からの盗用

1981年、「顕微鏡観察シリーズ」の1冊として『鉱物の顕微鏡観察』が出版された(図4)。その初版において、坪井の『偏光顕微鏡』と『鉱物及び岩石の光学的鏡検法』から多数の図版や式が無断で転載される、という著作権侵害が行われた。最終的には、悪意はなかった(と坪井たちによって)判断され、初版を回収・絶版とした上で、坪井の著作からの引用がなされていることを明記した改訂版が出版されることとなった。

誠太郎資料の概要調査から、同書の著者および出版社と著作権・出版権を侵害された坪井および岩波書店との間で交わされた文書類が発見された(図5、図6)。それらから、坪井側が著作権・出版権を侵害されたことを知ってから到着までの1年あまりの経緯を明確に知ることができる。本稿では、その概略を以下に紹介しよう⁹。

- ・1981年3月25日：『鉱物の顕微鏡観察』初版3,000部を印刷、1,020部を配本、31冊を献本や書評用等として配布

⁷ 資料を精査すると、さらに特定できる可能性がある。
⁸ 諏訪兼位：「名誉会員坪井誠太郎教授の逝去を悼む」、『岩石鉱物鉱床学会誌』81(12), 1986, p. 500.

⁹ この著作権侵害に関する資料一式(箱番号「特300」に、図4に示すようにまとめられた状態で収集・保管されている)より。



図4 『鉱物の顕微鏡観察』

同書初版(1981年)に、坪井の『偏光顕微鏡』内の図版と式が多数、無断転載された。このことに関して交わされた手紙類が挟まっているのが分かる。(撮影：柝内文彦)

- ・4月15日：坪井から著作権侵害の指摘を受けた著者が出版社に連絡、さらに、坪井を訪れ「まったく軽率にも私〔著者〕が…〔出版社に〕コピーした図版を渡した。それがそのまま本になったもので、…責任を感じる」と事情を説明し、謝罪。
- ・4月16日：出版社は著作権侵害を確認し、緊急役員会にて対応を協議。残部の出庫停止、配本済みについては販売中止・回収などの措置、坪井側への陳謝、などを行うことを決定、実施
- ・4月17日：出版社が著者と坪井を訪れ陳謝し、上記対応を説明。坪井は、著作権尊重の必要性を理解してくれるなら、岩波書店が了解すれば図表類の使用を許諾すること、著者を傷つけることは望んでいないこと、などの意向を表明
- ・4月22日：改訂版の「著者まえがき」の原稿が坪井に届く。坪井は、その内容で大筋了承
- ・4月下旬～11月下旬：細かなやり取りが重ねられる
- ・11月28日：坪井宅を訪れた出版社の編集部長に、坪井が「長い時間がかかったが私との件は、これで一切終わりたい」との考えを通知

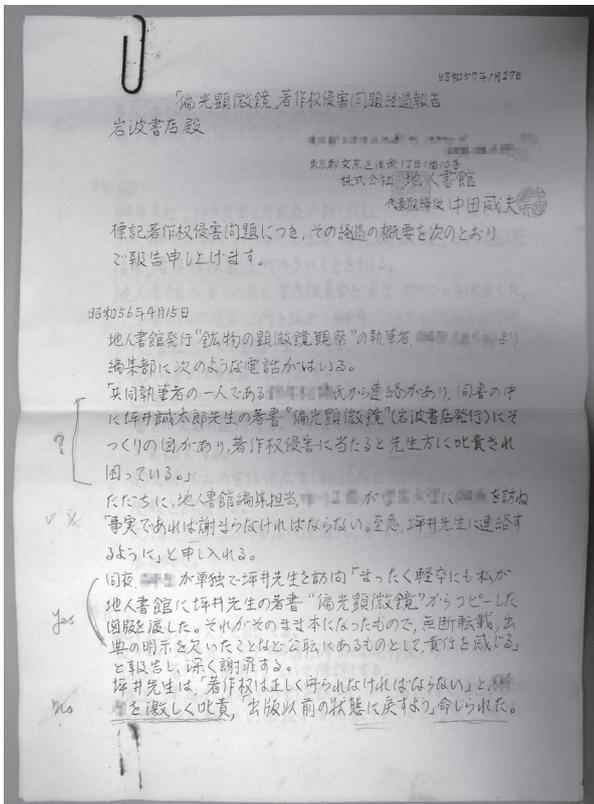


図5 岩波書店宛の経過報告

一部の個人名を伏せる処理を行っている(図6も同様)。(撮影・修正：柝内文彦)

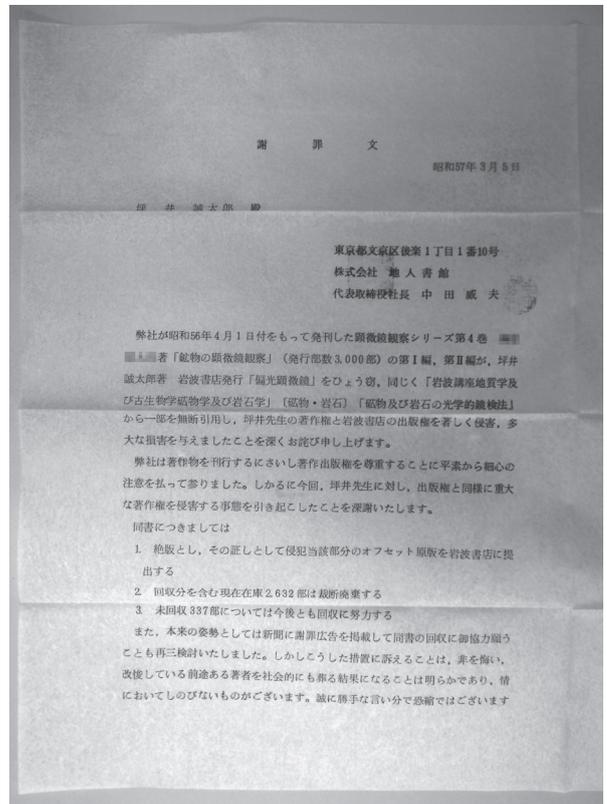


図6 坪井宛の「謝罪文」

(撮影・修正：柝内文彦)

- ・1982年3月5日：同日付の出版社発坪井宛の「謝罪文」で初版3,000部は絶版とすること、回収分を含む在庫2,630部余は廃棄すること、未回収340部弱は回収の努力を継続するが著者の前途を考えて謝罪や回収協力依頼の新聞広告は出さないこと、を報告

4月22日に坪井に送られてきた改訂版の「著者まえがき」の初稿には次のように記されている¹⁰。

偏光顕微鏡を… [用いて] 岩石や鉱物を観察するには光学的な性質を理解しなければなりません。幸い、学術的に優れた著書として坪井誠太郎著「偏光顕微鏡」岩波書店(1959年初版)があります。本書『『鉱物の顕微鏡観察』』のI・II編の大部分は、その坪井著の「偏光顕微鏡」の内容をそのまま、簡略にしたものです。図・式・表なども坪井著「偏光顕微鏡」及び…「鉱物及び岩石の光学的鏡検[法]」岩波書店(昭和6年)からそのまま、次の表に示す通りに借用いたしました。

「次の表」は上記引用文に続いて提示されており、それによると、坪井の著作から引用している図・式・表は全部で102にのぼる。『『鉱物の顕微鏡観察』』における図・式・表の通し番号から判断すると、ほぼ全ての図と式が坪井の著作からの引用ということになるが、これは著者が「日頃から坪井先生の著書「偏光顕微鏡」に親しんでおり、今回の執筆にあたり、結晶の光学性の説明には坪井先生の著作をもって説明するのが最も分かり易いと考え [た]」¹¹ からだった。

この改訂版『『鉱物の顕微鏡観察』』の出版は2001年まで続いた¹²。改訂版の出版時点で20年以上前の坪井の著作の内容を多数引用した同書が、その後20年余り出版され続けたということは、坪井の『偏光顕微鏡』が、同書執筆から40年あまりの時間に耐えるだけの内容を有していたことを示

している。これは、坪井の偏光顕微鏡に関する記述が「出版当時の世界のその種の教科書の水準を抜いていた」¹³ という評価が適切であることの裏付けと言えよう¹⁴。

4. おわりに

これまでの誠太郎資料の概要調査の報告を兼ねて、同資料から、坪井の偏光顕微鏡に関する研究が日本の地質学界でどのように評価されていたのかを読み解くことを試みた。第3節で述べたように、誠太郎資料を用いて坪井に対する従来の評価を検討できることが(そのような有用性を誠太郎資料は有していることが)示された。

誠太郎資料には、多数の日記や野帳、研究ノートや論文などの草稿類、第二次世界大戦中の軍事研究に関する資料、手紙類、などが多数含まれている。それらを日本地質学史資料として活用するためにも、今後は、資料の精査とアーカイブ化を鋭意進めたい。センターには既にDigital Cultural Heritageが構築されており、誠太郎資料もその中に収めることが望ましいのではないだろうか。同アーカイブには坪井正五郎関係資料も含まれており、誠太郎資料を加えれば、坪井家関係資料として一体的に公開することができるからだ。

最後に、情報学環図書室 飯野洋一係長、図書室職員の皆様、玉井建也氏、研谷紀夫氏、社会情報研究資料センター 山本博文前センター長、佐倉統現センター長の皆様は、今年度の誠太郎資料調査において、筆者に様々な便宜を図ってくださった。また、3.1節で紹介した資料については、収集の経緯および特に私的な面の強い私文書を公開する際に留意すべきことなどを、「坪井家関係資料」調査に携わった添野勉氏(国立民族博物館)にご教示頂いた。あつくお礼申し上げます。

(枅内文彦・情報学環客員研究員、金沢工業大学基礎教育部)

¹⁰ ditto.

¹¹ 1982年3月5日付の著者発坪井宛「謝罪文」(この著作権侵害に関する資料一式の一つ)より。

¹² 2001年に「新版 顕微鏡観察シリーズ」第4巻として出版された『岩石・化石の顕微鏡観察』に置き換えられた。

¹³ 都城秋穂：op. cit., p. 769.

¹⁴ この評価は、厳密には、『偏光顕微鏡』の元となった『岩石学I』における偏光顕微鏡に関する記述について、同書が出版された1939年当時の世界水準と比較してのものである。

小野秀雄関係資料『磐手新聞』について

玉井建也

東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センターには新聞や広告に関する歴史的資料が数多く所蔵されている。その中でも特に小野秀雄関係資料は、錦絵新聞やかわら版などメディアや広告に関する小野秀雄の収集物だけではなく、彼がスタートさせた日本における新聞学の研究活動の足跡をたどることのできる研究資料も多数存在していることでも有名である。

1. 小野秀雄と社会情報研究資料センター

まず本論に入る前に小野秀雄および彼と社会情報研究資料センターの関係について述べる。小野は明治18(1885)年、滋賀県に生まれ、その後、明治39(1906)年に東京帝国大学文科大学に入学しドイツ文学を研究、卒業後に萬朝報に入社し、大正4(1915)年退社し、その2年後に東京日日新聞に入社した。この前後よりかわら版などの収集に取り掛かりはじめ、大正8(1919)年には新聞社に在職したまま東京帝国大学大学院に入学し、新聞研究に取り掛かり始める。そして大正11(1921)年には『日本新聞発達史』を発刊し、その後は吉野作造、石井研堂らとともに明治文化研究会を設立、大正15(1925)年には東京帝国大学文学部志願講師として世界新聞史の講義を行い、昭和4(1929)年には東京帝国大学文学部に新聞研究室が開設されたのを受けて小野が指導を行った。これと同時に上智大学、明治大学の教授を歴任し、戦後には定年により東京帝国大学講師を退任しているにも関わらず、東京大学新聞研究所設立により特例として昭和24(1949)年に東京大学教授、新聞研究所長に就任する。また後に日本新聞学会初代会長に就任、新聞文化賞受賞もしている。

既述の東京大学新聞研究所に昭和39(1964)年に開設された「プレスセンター」が現在の社会情報研究資料センターの出発点となっている。その後、昭和42(1967)年に新聞研究所附属施設「新聞資料センター」となり、平成4(1992)年に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるのを受けて「情報メディア研究資料センター」と改称、平成16(2004)年に大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合に伴い、「社会情報研究資料センター」

と改称した。

以上のような組織変遷の中で、小野秀雄氏関連資料が寄贈されたのを受けて、資料群のうち瓦版や錦絵のみ1000点余りを先行して整理・保存を行っている。その成果は東京大学社会情報研究所創立50周年記念特別展示・東京大学コレクションⅨ「ニュースの誕生——かわら版と新聞錦絵の情報世界」展として1999年10月8日から12月12日にかけて東京大学総合研究博物館にて公開された(木下・吉見1999)。しかしながら、瓦版・錦絵以外の資料に関しては未整理の状態が続き、2010年度・2011年度の2年間で資料整理・保存活動が行われ、目録・デジタルアーカイブが公開されている(社会情報研究資料センター高度アーカイブ化事業2012)。

本稿では彼の収集活動および研究活動によって成立した小野秀雄関係資料の中で具体的に『磐手新聞』(整理番号A-1-71)を取り上げ、検討する。

2. 戦艦磐手について

既述のように小野秀雄関係資料には多くの新聞を中心としたメディア資料が含まれている。その中でも『磐手新聞』は特異な存在であり、アジア太平洋戦争以前から活躍した戦艦磐手の艦内にて発行された新聞である。

戦艦磐手は明治34(1901)年に竣工された巡洋艦であり、同年6月1日には当時の皇太子嘉仁が乗船している(JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. C10071377800、明治34年自1月至6月 2号編冊(防衛省防衛研究所))。その後、日露戦争では第二艦隊として日本海海戦に参加した(JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. C09050256200、第2艦隊戦闘報告 明治37. 8. 14(防衛省防衛研究所))。大正期には練習艦として活動し、例えば、大正12(1923)年には、江田内を7月14日に出港し、広島・横須賀・室蘭・大湊・新潟・舞鶴・鎮海・仁川・大連・旅順・青島・佐世保・徳山・呉・大阪と巡った後、9月23日に伊勢湾に帰港している。これは近海航海の訓練で、その後、遠洋航海として10月21日に横須賀を出発し、上海・馬公・香港・マニラ・シンガポール・バタビヤ・フレマントル・メ

ルボルン・ホバート・シドニー・ウェリントン・オー克蘭ド・ヌーメア・ラポール・トラック・パラオ・サイパンと巡った後、翌年4月5日に横須賀に帰港している（JAC-AR（アジア歴史資料センター）Ref. C03022620000、密大日記 大正12年6冊の内第4冊（防衛省防衛研究所））。

3. 『磐手新聞』について

艦内新聞に関しては、どれだけの戦艦にて発行されていたのか、そして発行期間はいつなのか、という全体像を把握するための情報が大きく不足しており、個別に把握されている新聞の検討が行われているのみである（山中2007）。では、今回取り上げる『磐手新聞』はどのようなものなのか。

既に述べたように巡洋艦磐手において発行された新聞であるが、創刊号の発行日は昭和11（1936）年2月11日、最終号となった251号の発行日は同年11月20日となり、練習艦として活動していた時期の発行となる。大きさはA4版表裏2ページであり、日刊である。創刊号には「凡ソ艦内新聞ハ次ノ如キ使命アリ」として「一、軍隊教育ノ一手段、二、艦内外ノ「ニュース」報道機関、三、趣味情操ノ啓発」を挙げ、「諸作業ニ忙殺サレテ他事無シト雖モ忙中ノ少閑ノ儀、磐手新聞ニ移ス中得タ心ノ糧ハ毎日三度ノ食事ノ如キ「カロリー」ト親シミヲ覚ヘシムルニ至ラバ望外ノ光栄トナス」と述べているように、単に情報を掲載するだけでなく、艦内における娯楽としての位置付けも指標とされていたことがわかる（図1）。



図1 磐手新聞創刊号表紙

発行は磐手新聞社が行い、社長は海軍大将長谷川敏行、副社長は海軍中尉鳥巢健之介、編集主任が海軍軍医中尉伊佐次賢三、編集員として海軍中尉佐々木富二男、海軍機関少尉高津信彦、海軍兵曹長佐藤岩猪、編集補佐として海軍一等兵曹香川栄治の名が挙げられている。料金は階級によって異なり、艦長が40銭、士官室士官が30銭、司令部が20銭、次室士官が20銭、候補士が15銭、准士官が15銭、下士官が10銭、兵が5銭であり、月末締切で集金することになっている。投稿は匿名も可となり、投書箱を艦内各所に設け、毎日朝8時に回収している。なお、新聞社が意図する投稿原稿の分野は、論文・俳句・散文・和歌・詩文・小語・艦内ニュース笑話・漫画・漫文・時事である（『磐手新聞発行ニ際シテ覚書』（『磐手新聞』創刊号））。

4. 『磐手新聞』の内容に関して

既述のように新聞社体制を作り、編集として様々なジャンルを投稿として募集していたが、実際の紙面はどのようなものであったのか。紙面の構成は付録や創刊号・終刊号などの特別な場合を除き、大きく変わることはない。題字に書かれる新聞名は「いはて新聞」であり、題字の下に天候情報や新聞発行日および翌日の艦内における予定を掲載している（図2）。印字は基本的に1色であるが、まれに2色刷りの場合もある。

そして2号から最終号の一つ前である250号まで附録などを除き1面トップで掲載されていたのが、「明治天皇御



図2 題字部分(2号より)

制」と書かれた和歌である。毎回、様々な模様縁に縁どられている。そしてその明治天皇の和歌の横にはイラストが置かれているが、多くの場合は和歌や巻頭ニュースとは関係がない（図3）。

既述のように投稿原稿を受け付けていたが、投書箱は2月17日から艦内に設置されたため2号から投稿のみで紙面を飾るということをなく、副長による「我建国ノ精神」の連載がスタートしている。以後、「日章国旗の意義由来」、「軍艦撃手戦歴」など海軍活動の根本的知見に関わる連載が続く。これ以外にも2号からは「巡航地・寄港地案内」が不定期連載として掲載され、さらには漫文「ラックル早降り法」が掲載されるなどバラエティ豊かな紙面作りが行われている（図4）。

投稿原稿が掲載されはじめる8号以降は随時、漫画漫文や狂歌、詩歌などが掲載されるようになり、画一的な紙面作りではなく娯楽も重視していることがわかる。また、これ以外にも随時入ってきたニュースを掲載しており、3号には「欧米情報」としてロンドンのニュースが伝えられるなどしており、世界各地の情報が掲載され続けている。もちろん日本国内のニュースも掲載され、8号には美濃部達吉が襲われた情報、オリンピック選手の決定など多岐に

渡っている。発行の中期以降になると娯楽性も高くなり、艦内で結成されている相撲部を数回に渡って取り上げ、「相撲部員銘伝」として部員の詳細な紹介も行っている。

何日も同じ船内での活動が続くため、相撲のようなスポーツや映画・演劇というものは娯楽として非常に重要視されていたようである。撃手新聞社としても娯楽を重要視していたことは既述のように漫画漫文などを多く取り上げる紙面作りからも分かるが、号外からも理解できる。この「いはて新聞」の号外が発行されたのは全部で3回である。1回目は2月23日に発行され、一面に「低気圧襲来！！見事な夜間作業」と書かれており、海上において号外になりうるニュース性を把握することが出来る。そして裏面には「待望の映画封切さる！！」と書かれ、実際に上映されるのは「皇国の栄」、「御召艦上ノ満州国皇帝」、「源氏小僧」の3本であった。2回目の号外は2月29日に発行されており、「ラヂオニュース」と書かれている。ラジオから通じて艦内に入ってきた二・二六事件の続報を時系列的に並べており、戒厳令下の様子や投降を呼びかける文面などが記録されている（図5）。そして3つ目の号外が3月14日に発行されており、「祝優勝」と書かれ、相撲および銃剣術の勝敗表が掲載されている。

このように艦船ならではの重要性を持ったニュースに関しては号外が出されていたが、途中から発行されなくなる。しかし、号外として出されたニュースバリューと同等



図3 巻頭和歌およびイラスト（10号より）



図4 ラックル早降り方（2号より）



図5 二・二六事件に関する号外

のものはどのように扱われていたのか。事件に関しては重大なニュースが起こらなかったことから通常の紙面内に組み込まれていくが、娯楽的要素の高いものは通常発行の紙面だけではなく、付録として活用されていく。付録は当初は、巡洋艦磐手の命名の元になった磐手神社の説明や航路予定図、訓示や海兵学校など堅い内容のものしか発行されていなかったが、次第に娯楽内容へと変化していく。6月14日に発行された付録では「映画の夕」として栗島すみ子主演の「デパートの姫君」を取り上げており(図6)、裏面にはそれ以外の上映作品である「のらくろ二等兵」および武道大会の結果を取り上げている。この「映画の夕」は6月21日にも付録として掲載され、その時は「花火」、「難船す物語」が上映されている。

その後も娯楽路線は続き、6月17日に発行された付録では「待望の軍艦磐手の歌が出来ました」として「軍艦磐手の歌」の五線譜と歌詞とともに、「大洋を行く」、「洋上の母恋し」、「航海日記」、「マドロスの歌」、「越え行く潮路」、「今昔の感」の歌詞のみが掲載されている。また、翌6月18日の付録には「演芸会」および「運動会」のプロ



図6

グラムが掲載されており、洋上における娯楽情報として大きな役割を担っていることが分かる。

しかし、その後はこのような映画上映や演劇・武道大会の情報は次第に本紙へと移行し、これまで本紙で随時掲載されていた寄港地案内が付録として発行されることになる。新しい港に寄港するごとに新たに付録が発行され、シアトル、ロサンゼルス、インド諸島、キューバ、ボルチモア、メキシコ、ハワイ、ホノルル、南洋諸島、ヤルト島、トラック島、サイパン島を現地の気候・風土から旧跡などに至るまで時にイラストを入れながら概説的に紹介している。

5. おわりに

以上、簡単にではあるが『磐手新聞』を紹介してきた。この新聞を小野自身が入手した経緯に関しては不明であるが、彼のコレクション内にこれ以外の艦内新聞が存在していないことから、艦内新聞を体系的に収集していたわけではなく、新聞学研究において総括的に収集していた中で手に入れたものと推察することはできる。また、社会情報研究資料センター所蔵の『磐手新聞』には途中、7月10日にシアトルから練習艦隊主計長藤田伝次が出した手紙の写しが挿入されている。さらには航海日誌の一部の写し、及び欧米の言葉の説明書きの写しも同封されていることから、藤田かその関係者の所有物を何らかの経緯で小野が入手したものと考えられる。

<文献>

- ・木下直之・吉見俊哉編『ニュースの誕生 かわら版と新聞 錦絵の情報世界』(東京大学総合研究博物館、1999年)
- ・社会情報研究資料センター高度アーカイブ化事業編『小野秀雄関係資料目録』(東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センター、2012年)
- ・山中恒「日本ミニコミ紙の元祖・艦内新聞」(『日本古書通信』939号、2007年)

社会情報研究資料センター所蔵資料の保存対策

飯野 洋一

1. 発端

平成23年4月1日、経済学図書館図書運用係長から情報学環・学際情報学府図書係長に異動した時点での社会情報研究資料センター所蔵資料の保存状況は以下のとおりであった。

- ・新館M4階 製本原紙(2121冊)、新館3階(3397冊)に徴付着
 - ・新館M3階 製本原紙(2070冊)に徴繁殖
 - ・新館1階 マイクロフィルム3万本を収納したキャビネット付近から強度の酢酸臭
 - ・地下書庫前室 製本原紙(460冊)に徴付着
 - ・地下書庫1室 新聞縮刷版(2700冊)に徴付着
 - ・地下書庫2室 製本原紙(800冊)に徴繁殖
 - ・地下書庫3室 新聞縮刷版(4500冊)に徴繁殖
 - ・地下書庫4室 製本原紙(1800冊)に徴付着
- このような状態にも拘らず、保存環境は脆弱であった。新館1階、M2階の空調機は平成18年6月、地下書庫1室、4室～5室の空調機は平成11年7月の設置以降、保守点検が実施されたことは一度もなかった。
- 地下書庫1室～5室に平成13年5月、家庭用除湿機が設置されたが、老朽化し、ほとんど用をなしていなかった(図1「社会情報研究資料センター所蔵資料の保存状況平成23年4月1日現在」を参照)。
- 一刻の猶予もならない危機的状況であったと言ってよい。

図1 社会情報研究資料センター所蔵資料の保存状況 平成23年4月1日現在

場所	資料	数量	設備	状況	
新館M4階	製本原紙	2121冊	なし	徴付着	
新館3階	製本原紙	3397冊	なし	徴付着	
新館M3階	製本原紙	2070冊	なし	徴繁殖	
新館M2階	マイクロフィルム	18000 リール	空調機(平成18年6月設置)		
新館1階	マイクロフィルム	30000 リール	空調機(平成18年6月設置)	酢酸濃度3ppm 平成23年6月23日	
地下書庫	前室	製本原紙	460冊	なし	徴付着
	1室	新聞縮刷版	2700冊	空調機(平成11年7月設置)	徴付着
				家庭用除湿機(平成13年5月設置)	
	2室	製本原紙	800冊	家庭用除湿機(平成13年5月設置)	徴繁殖
	3室	新聞縮刷版	4500冊	家庭用除湿機(平成13年5月設置)	徴繁殖
	4室	製本原紙	1800冊	空調機(平成11年7月設置)	徴付着
家庭用除湿機(平成13年5月設置)					
5室	原紙	無量	空調機(平成11年7月設置)		
			家庭用除湿機(平成13年5月設置)		

2. 各年度の資料保存対策

1) 平成 23 年度の資料保存対策

平成 23 年度委員会経費は前年度末に事実上決定されており、資料保存対策に充当できる予算は消耗品費だけという状況であった。このため、緊急避難的に必要最小限の措置を取った以外は有効な対策を講じることができなかった。

6月に産業医の巡視があり、新館1階のマイクロフィルムを収納したキャビネット付近から強度の酢酸臭がしたので、人体への影響について指摘を受け、環境改善を要請された。

6月23日、新館1階の酢酸濃度を測定したが、酢酸濃度は3ppmであった。新館1階は相対湿度が71%と高いため、このままではフィルムベースの加水分解が進行し、酢酸濃度は高まる危険性があり、エアコン等の機器に腐食が生じる可能性があった。

このため、7月に新館1階に業務用除湿機を設置し、空調機の保守点検を実施した。9月12日に酢酸濃度を再測定した結果、3ppmから1.5ppmに半減した。

さらに、地下書庫2室～3室の製本原紙、新聞縮刷版に黴が大量に繁殖しているため、業務用除湿機を各1台設置した。

2) 平成 24 年度の資料保存対策

前年度5月に平成24年度の委員会経費25%削減の要請があり、新聞データベースの契約、外国新聞(数タイトル)の購入を中止した。これによって、委員会経費25%削減に対応すると共に資料保存対策費として約90万円を確保した。

田嶋記念大学図書館振興財団助成金の交付申請が承認され、委員会経費と併せて、黴が繁殖している地下書庫2室の製本原紙約800冊、3室の新聞縮刷版約4500冊の黴拭き取り作業、書架の棚板252段のクリーニングを5月下旬から6月上旬にかけて実施することができた。

地下書庫と新館M3階に収蔵されている新聞縮刷版・製本原紙に黴が大量に付着・繁殖し、新館1階の酢酸濃度が4月26日時点で3ppmと高く、資料保存の上で極めて望ましくない状況にあった。新館1階の除湿機(前年7月に設置)は5月上旬に稼働を停止した。

このため、6月に業務用除湿機を地下書庫1室、4室に各1台、M3階に2台設置し、新館1階に1台を再設置した。その後、新館M2階の湿度が高いため、新館M3階の

1台を新館M2階に移設した。

特筆すべきは、新館1階の空調機の新規設置である。平成18年9月に設置した新館1階の空調機は老朽化が著しく、修繕、清掃、冷媒補充に努めたが、8月下旬に稼働を停止するに至った。

9月下旬には業務用除湿機も稼働を停止し、一時は扇風機1台のみで対応するという由々しき事態に立ち至ったが、学環長裁量経費により、10月に空調機を新規設置することができた。

空調機の正常な稼働を維持するため、新館1階の空調機の保守点検(年4回)と地下書庫1室、4室～5室と新館M2階の空調機の保守点検(年1回)を実施した。

3) 平成 25 年度の資料保存対策

前年度3月に平成25年度の委員会経費20%削減の要請があった。年度末のため、外国新聞の購入中止で対応することができず、他の費目(マイクロフィルム購入費、消耗品費など)で削減に対応せざるをえなかった。資料保存対策費も約90万円から約55万円に減額となった。

5月に長期間に亘り停止していた書庫内のダクトを再稼働し、6月に9ヶ月ぶりに業務用除湿機を新館1階に再々設置した結果、新館1階の酢酸濃度は6月10日時点で1ppm、12月9日時点で0.5ppmと激減した。

6月に新館1階～M4階及び地下書庫の床の汚れが酷いため、書庫清掃を実施し、新館M3階の湿度が80%を越えているので、業務用除湿機を1台増設した。

ただし、地下書庫1室の1台(前年5月に設置)は9月上旬に至り、稼働を停止した。また、製本原紙に黴が大量に付着しているため、11月下旬に新館M2階の1台を新館M4階に、新館M3階の1台を新館3階に移設した。

10月に黴が繁殖している新館1階前室のTimes Indexなど406冊を対象に黴拭き取り作業(棚板クリーニングも含む)を実施した。

空調機の正常な稼働を維持するため、新館1階の空調機の保守点検(年2回)と社会情報研究資料センター事務室及び閲覧室、地下書庫1室、4室～5室と新館書庫M2階の空調機の保守点検(年1回)を実施した。

その他、阪神淡路大震災関係の新聞原紙(中性紙箱収納)の移動、地下書庫前室、新館M4階の製本原紙の廃棄東日本大震災関係の新聞原紙の保存などを実施した。

4) 平成 26 年度の資料劣化対策 (予定)

前年度 6 月に平成 26 年度の委員会経費 30%削減 (平成 24 年度比) の要請があり、外国新聞 (数タイトル) の購入を中止した。

当初は購入中止分で新規に新聞データベースを契約する予定であったが、技術的障壁と費用対効果について検討した結果、新聞データベースの契約を見送り、資料保存対策に充当することになった。

平成 26 年度の委員会経費は確定していないが、徴が繁殖、付着し、危機的状況に陥っている製本原紙 (新館 M4 階～M3 階) の徴拭き取り作業、新館 1 階のキャビネット廃棄、棚板設置、中性紙舟にマイクロフィルム収納 (一部実施)、空調機の保守点検、業務用除湿機の設置、書庫清掃などを実施する予定である。

3. 広報・見学会

平成 24 年 5 月～6 月に実施した徴拭き取り作業について、『社会情報研究資料センターニュース』第 23 号、『Better Storage』2013 No.03 に掲載した。

文部科学省図書館、工学・情報理工学図書館から掲載記事について問い合わせがあった。

平成 24 年 5 月～6 月に実施した新聞縮刷版・製本原紙

の徴拭き取り作業の学内見学会を 8 回 (5 図書館 (室) 参加者約 50 名)、平成 25 年 10 月に実施した Times Index などの徴拭き取り作業の学内見学会を 2 回 (2 図書館 (室) 参加者 13 名) 開催し、書庫見学も行った。

さらに、社会情報研究資料センター所蔵資料の保存対策の見学会を平成 25 年 10 月 (国立国会図書館関西館、京都大学東南アジア研究所、アジア経済研究所図書館など 6 図書館 (室) 参加者 7 名)、平成 26 年 1 月 (新図書館構想幹事会、新図書館課題検討グループ 参加者 11 名) に開催し、書庫見学を行い、意見交換をした。

4. 平成 27 年度以降の課題

平成 23 年 4 月に異動後、社会情報研究資料センター所蔵資料の保存対策を講じてきた。その結果、3 年前に比較して保存状況は格段に整備されたが、保存対策はその緒についたばかりで、課題は山積している (図 2 「社会情報研究資料センター所蔵資料の保存状況 平成 26 年 4 月 1 日現在」を参照)。

前途は遼遠であり、課題の解決は容易なことではない。

残された在任期間は 1 年となり、時間的、予算的制約のため、山積する課題を全て解決することは不可能になった。しかし、平成 27 年度以降も引き続き資料保存対策を

図 2 社会情報研究資料センター所蔵資料の保存状況

平成 26 年 4 月 1 日現在

場 所	資 料	数 量	設 備	状 況	
新館 M4 階	製本原紙	2121 冊	除湿機 (平成 25 年 11 月設置)	徴付着	
新館 3 階	製本原紙	3397 冊	除湿機 (平成 25 年 11 月設置)	徴付着	
新館 M3 階	製本原紙	2070 冊	除湿機 (平成 24 年 7 月設置)	徴繁殖	
新館 M2 階	マイクロフィルム	18000 リール	空調機 (平成 18 年 6 月設置)		
新館 1 階	マイクロフィルム	30000 リール	空調機 (平成 24 年 10 月設置)	酢酸濃度 0.5ppm 平成 25 年 12 月 9 日	
			業務用除湿機 (平成 25 年 6 月設置)		
地下書庫	前室	製本原紙	0 冊	廃棄 (平成 25 年 9 月)	
	1 室	新聞縮刷版	2700 冊	空調機 (平成 11 年 7 月設置)	徴付着
	2 室	製本原紙	800 冊	業務用除湿機 (平成 24 年 3 月設置)	徴拭き取り 平成 24 年 5 月～6 月
	3 室	新聞縮刷版	4500 冊	業務用除湿機 (平成 24 年 3 月設置)	徴拭き取り 平成 24 年 5 月～6 月
	4 室	製本原紙	1800 冊	空調機 業務用除湿機 (平成 24 年 5 月設置)	徴付着
	5 室	原紙	無量	空調機 (平成 11 年 7 月設置)	

講じていかなければならない。

そのためには、予算の確保が必須の条件となるが、委員会経費のみでは空調機の保守点検、書庫清掃などに止まり、抜本的な解決には不十分である。

田嶋記念大学図書館振興財団助成金（隔年で申請）、『上海日日新聞』『大連新聞』の著作権料収入（平成27年度から情報学環の収入）などの外部資金を活用し、資料整備（微拭き取り作業、マイクロフィルムの全点調査と修復など）、環境整備（空調機、空気清浄機の設置など）を講じていく必要がある。

のみならず、資料保存対策の必要性、緊急性について学環長、事務長を始めとする情報学環教職員の理解と協力を得る必要がある。作業遂行に際しては、関連業者との深い信頼関係に基づき、綿密な打ち合わせを行い、円滑に遂行することが肝要である。

さらに、地下書庫の壁、床、集密書架、空調機が著しく老朽化しており、資料保存の上で危機的状況にある。新図書館構想と連動し、新図書館課題検討グループ（自動化書庫・資料保存検討チームなど）と資料保存について問題意識を共有して、地下書庫の全面的改修を実現していくことが将来の最重要課題である。

従来どおり、経済学部資料室の小島浩之講師、矢野正隆特任助教を始めとする資料保存の専門家に助言と指導を受けると共に、社会情報研究資料センターニュースへの掲載などの広報活動、見学会などを積極的に行い、学内他部局、他大学とも連携し、資料保存の実を挙げていくことが求められる。

（飯野 洋一 情報学環・学際情報学府図書係長）

センター情報

■社会情報研究資料センター長

平成 25 年度 佐 倉 統 (情報学環)

■社会情報研究資料センター運営委員会委員

平成 25 年度の委員の方々です。

馬 場 章 (委員長 情報学環)

佐 倉 統 (情報学環)

石 崎 雅 人 (情報学環)

金 森 修 (情報学環)

丹 羽 美 之 (情報学環)

中 野 公 彦 (情報学環)

成 原 慧 (情報学環)

■外国新聞の購入中止

平成 26 年度から下記の外国新聞 (原紙) の購入を中止いたします。

Bangkok Post、Daily Mirror、Financial Times、Los Angeles Times、Le Monde、New York Times、Observer、Times、Washington Post、Die Welt

■阪神淡路大震災関係の新聞原紙の移動

平成 25 年 8 月 6 日、情報学環正面玄関地下のドライエリアの倉庫に長期間に亘り保管されていた阪神淡路大震災関係の新聞原紙 (中性紙箱収納) 178 箱を新館書庫 M 2 階へ移動しました。

国内紙は 52 タイトル (保存期間 平成 7 年 1 月 17 日～7 月 20 日)、国外紙は 29 タイトル (保存期間 平成 7 年 1 月 17 日～2 月 17 日) です (表紙写真を参照)。

■黴拭き取り作業

平成 25 年 10 月 3 日～4 日、黴が繁殖している新館 1 階前室の Times Index など 406 冊を対象に黴拭き取り作業 (棚板クリーニングも含む) を実施しました。

■東日本大震災関係の新聞原紙の保存

平成 26 年 2 月、東日本大震災関係の新聞原紙を新館 M 4 階に保存しました。国内紙は 49 タイトル (保存期間 平成 23 年 3 月 11 日～9 月 15 日)、国外紙は 38 タイトル (保存期間 平成 23 年 3 月 11 日～4 月 15 日) です。